

国立西洋美術館開館 60 周年記念 松方コレクション展

国立西洋美術館（東京・上野公園） 2019.06.11～09.23



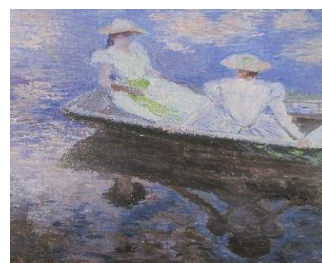
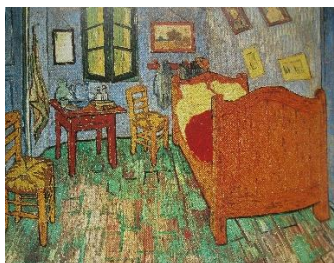
「松方幸次郎」は、神戸の実業家で 1910 年代半ば～1920 年代半ばにかけて収集した西洋美術品が数多く、巨匠「モネ」「マネ」「ゴーギャン」「ゴッホ」などの近代フランスの名画を含む一大コレクターとして広く知られている。

本展では、「松方コレクションとはどのようなものだったのか」「松方コレクションはどのように形成され散逸したか」を軸に時系列で構成されている。

< 注目される 2 つのポイント >

- 1) **ガラス乾板**：フランスのカメラ人が撮影したロダン美術館礼拝堂に保管されていた「348 点」の作品のうち、今回「10 点程」が公開されている。
- 2) **モネの大作《睡蓮、柳の反映》**（1916 年）の大規模修復後初公開。

本作品は、60 年にわたり行方不明であったが、2016 年にルーヴル美術館で上部欠損の状態で見つめられた「横幅約 4 m の大作」が修復されて披露される。



左 フィンセント・ファン・ゴッホ 《アルルの寝室》 1889 年油彩/カンヴァス
アルル時代の傑作の一つで、寝室は彼の休息場所であると同時に自身の「自画像」とも見える作品で、単純かつ明快な独特の輪郭線が力強く生きている。

中 ピエール＝オーギュスト・ルノアール 《帽子の女》 1891 年油彩/カンヴァス
この作品は、比較的薄めの絵の具を細筆で丹念に塗り重ねることによって、カンヴァスの内部から物そのものの材質感をにじみ出させるようにして全体を浮き出させている。

右 クロード・モネ 《舟遊び》 1887 年 油彩/カンヴァス

完成度が高い作品で、画面一杯を占める水面の上半分は、明るい空を映し出した青とバラ色、下半分は小舟と娘たちの影が濃紺、茶、青で描かれ、人も舟も水面と同じ風景となって画面に溶け込んでいる。構図は、浮世絵からヒントを得たものとされ、揺らめく光と影が作り出す水面の色のハーモニーにある。